

# 家持の聖武朝回想と『万葉集』の終焉

——高円歌群の依興歌を中心として——

鈴木道代

## 一 はじめに

卷二十は『万葉集』の最終の歌巻であり、また家持歌終焉の巻でもある。その意味において『万葉集』卷二十の歌巻は、『万葉集』の終焉を考えるのに重要な意義を有している。卷二十にあつての家持は宴席に歌の場を求め、自由な歌の力を失い、まさに『万葉集』の終焉へと向かつていく。それを象徴するのが高円を詠んだ歌群である。この歌群は聖武天皇への回想と追慕に終始するように、この時の家持の心裡には過去という時間のみが存在しているように思われる。高円という場所は、家持のそのような心裡を明らかに示している。高円の地については、史書には記されないものの、『万葉集』に「十一年己卯、天皇の高円の野に遊獵し給ひし時に、小さき獸都里の中に泄走す」(巻

六・一〇二八)や「高円の宮」(巻二十・四三一五、四三一六)、「高円の離宮処」(巻二十・四五〇六、四五一一)などとあり、聖武天皇の離宮が置かれたことが知られる。家持自身も卷二十の他に、高円の地を詠んだ長反歌が卷八に合わせて三首あり、若かりし頃からなじみの地であつたことが窺える。ただ家持が高円の地において、または高円を偲んで詠んだ歌は卷二十に集中する。最初は卷二十の前半、天平勝宝五(七五三)年八月に、「二三大夫等、各提壺酒登高圓野、聊述所心作歌」を詠み(A)、次は翌年の天平勝宝六(七五四)歳七月に、「獨憶秋野、聊述拙懷作之」を詠み(B)、最後は卷二十の終盤である天平宝字二(七五八)年に、「依興各思高圓離宮處作歌」を詠む(C)。高円歌群の作歌動機としては、高円離宮および聖武天皇への「憧憬・敬仰」<sup>2</sup>にあつたことが指摘されており、卷二十

の歌は、家持を取り巻く政治的状況との関係で論じられることが多く、この高円歌群についても例外ではない。

天平勝宝元（七四九）年には、聖武天皇が讓位し阿倍内親王が即位して孝謙天皇の時代となった。また、藤原仲麻呂が紫微令に任命され、朝廷の政權は確実に仲麻呂主導へと移行してゆく。高円歌群Aが作歌されたのはその四年後のことである。このころの聖武天皇については、病のために政治の一線を退いたことを川口常孝氏が指摘するように、表舞台からは姿を消してゆく<sup>③</sup>。その翌年に高円歌群Bが作歌されるのである。また、高円歌群Cは、『万葉集』最終歌の前年である天平宝字二（七五八）年の作である。この二年前の天平勝宝八（七五六）歳には、家持のより所であった橘諸兄が致仕し、聖武天皇が崩御した。さらにその翌年には橘諸兄が薨去し、また聖武天皇の遺言によって皇太子となった道祖王が地位を廃され、代わって仲麻呂の推挙により大炊王が皇太子となり、仲麻呂の権力は盤石なものとなった。このような政情の中で高円歌群Cが成立したのである。

歌群の歌い手については、高円歌群Bの左注に「獨憶秋野」とあり、家持の独詠歌であるが、高円歌群Aは、「二三大夫等」と高円野に登り作歌したことが題詞にあり、また高円歌群Cは、それぞれの歌の左注に作者名が記されて

いる。高円歌群Aの参加者は大伴池主と中臣清麿である。池主は、言うまでもなく家持の越中時代の文学の仲間であり、家持とは越中時代のみならずその前後にも交流があった。中臣清麿は母を多治比志麻呂真人の女とし、室を多治比真人古奈祢とするなど、多治比氏との関係が深い人物であり、その関係から大伴氏とも交流があったものと思われる。もともと清麿は橘奈良麿の乱以降も、朝廷において重役を果たす人物であり、『続日本紀』の薨伝では、「清麻呂は数朝に歴史して国の旧老と為り。朝儀国典、諳練する所多し。位に在りて事を視ること、年老いたりと雖も、精勤にして怠るに匪ず<sup>④</sup>」と長年の功勞が記されている。高円歌群Cは、歌群Aと同じく清麿の他、大原今城真人と甘南備伊香真人が参加している。大原今城は、『万葉集』巻四・五一九の題詞に、「大伴女郎の歌一首 今城王の母なり。今城王は後に大原真人の氏を賜へり」とあり、大伴氏と血族関係にある。また甘南備伊香は、天平十八年、無位より従五位下となり、天平勝宝元年に従五位上となるが、仲麻呂政權の中で宝龜三年に正五位下となるまで約二十三年間昇進に恵まれなかった。このように、高円歌群の参加者は、聖武天皇の皇親派、および家持周辺の人物であったとみられる。

このような歴史的要因からこれらの歌群の成立を見るな

らば、家持やその仲間たちがかつての華やかだった頃の聖武天皇とその時代を回顧し、思慕するという感傷的な歌群だと言えるだろう。ただこれらの歌をそれぞれの歌群としてまとめ、さらに巻二十の中に位置づけて行くという家持の主体的行為には、歌による家持自身の精神史が刻まれているように思われる。そこで巻二十の高円歌群の成立を読み解くことにより、家持が『万葉集』を閉じてゆく過程について考えてみたい。

## 二 「所心」と「拙懐」——思慕と追憶の歌

### 〈高円歌群A〉

天平勝宝五年の八月十二日に、二三の大夫等の、各々壺酒を提げて高円の野に登り、聊かに所心を述べて作れる歌三首

高円の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずとも

(巻二十・四二九五)

右の一首は、左京少進大伴宿禰池主

天雲に雁ぞ鳴くなる高円の萩の下葉はもみちあへむかも

(同・四二九六)

右の一首は、左中弁中臣清麿朝臣

をみなへし秋萩凌ぎさを鹿の露分け鳴かむ高円の野ぞ

(同・四二九七)

右の一首は、少納言大伴宿禰家持<sup>5)</sup>

家持はこの題詞に、二三の大夫たちが「壺酒を提げて」高円の野に登り、「所心」を述べて歌を作ったことを記している。二三の大夫等が壺酒を提げて集まるという宴には、三月十九日に、家持の庄の門の槻の樹の下にして

宴飲せる歌二首

山吹は撫でつつ生さむありつつも君来ましつつ挿頭し  
たりけり (巻二十・四三〇二)

右の一首は、置始連長谷

わが背子が屋戸の山吹咲きてあらば止まず通はむいや  
毎年 (同・四三〇三)

右の一首は、長谷花を攀ち、壺を提げて到来り、是に因りて、大伴宿禰家持のこの歌を作りて和へたり。

という歌群がある。この歌群の題詞や左注によると、家持の庄の門の槻木の下での宴飲において、置始長谷が「壺酒」を提げてやって来たという経緯が記されており、家持の田荘の門前という場所での気の置けない仲間たちの私的な宴楽が想定される。先の高円歌群Aも身近な仲間たちとの私的な宴であった。このような宴で「所心」を述べたのが歌群Aなのである。ここで「所心」という語が問題となる

が、この語については、日本古典文学全集『万葉集』には、「所思などに学んだ造語か」とし和習漢語の可能性を指摘している。また瀬間正之氏によって敦煌変文に一例あることが指摘されているほか、仏典にも使用されている。一方、後世の唐代の詩には、「平生所心愛」や「堪行慰所心」などの表現が見られ、奈良朝前期に漢語として受容され、奈良朝の知識人たちの間で知られた漢語であった可能性もぬぐえない。しかし、直接の典拠を見出すことは困難であり、「所心」という語の由来は不明であると言わざるを得ない。『万葉集』の「所心」は八歌群十例見られ、その初出は巻七の譬喩歌である。

闇の夜は苦しきものを何時しかとわが待つ月も早も照らぬか  
(巻七・一三七四)

朝霜の消やすき命誰がために千歳もがもとわが思はな  
くに  
(同・一三七五)

右の一首は、譬喩歌の類にあらず。ただ「闇の夜」の歌人、所心の故に並にこの歌を作れり。

因りて、この歌をもちてこの次に載せたり。

譬喩歌の部立てに載るこの二首は、左注によると「闇の夜」の歌人が「所心」の故にあわせてこの歌を作ったという。「闇の夜」の歌とは、「来てくれるあてのない恋人を待ち焦がれる者の苦しさ」を待ち望む月に託している。

譬喩歌でないにも拘わらず次に載る歌は、自分の命はかないものであるが、千歳にも生きたいと思うのはあなたの為なのだという。ここには別離の状態の男女が愛する者を思う内容である。相手が不在であることに対して、その不在の相手への思いを「所心」というのは、家持の「所心」の基本となつていふと思われる。

ア ……ここに羈旅を悲傷び、各々所心を陳べて作れる歌十首  
(巻十七・三八九〇～九九)

イ ……この日、白雪忽ちに降りて、地に積むこと尺余なり。

この時に、漁夫の船、海に入り瀾に浮かぶ。ここに守  
大伴宿禰家持、情を二つの眺めに寄せて、聊かに所心  
を裁れり。  
(巻十七・三九六〇～六一)

ウ 忽ちに、京に入らむとして懐を述べたる作を見る。生  
別は悲しく、腸を断つこと万廻なり。怨むる緒禁め難  
し。聊かに所心を奉れる一首并せて二絶

エ ……生別の悲しび、それ復何とか言はむ。紙に臨みて悽  
断す。状を奉ること不備。(巻十八・四〇七三～七五)

一、所心の歌

\* 越中国の守大伴家持の報へ贈れる歌四首」に「一、  
所心に答へ、即ち古人の跡を以ちて、今日の意に代へ  
たる」(同・四〇七八)がある。

オ 越中守大伴宿禰家持の報へたる歌、并せて所心。三首  
(卷十八・四〇八二〜八四)

カ … 「奈杼麿朝集使に差はさえ、京師に入らむとしき。」

此に因りて餞せし日に、各々歌を作りて聊かに所心を

陳べき」といへり。(卷二十・四四七二〜七三)

点線で示したようにア、ウ、エ、カは生別離の悲しみの情を「所心」と記している。このような中で、イは家持と池主とが再会した喜びの歌であるが、歌の内容は、「千重敷く」雪や「船楫」に託して、再会を待ち望む家持の思いを歌っている。オは京にいる叔母の坂上郎女からの歌に対して、越中にいる家持が応えた歌であり、めづらしく鳴く「ほととぎす」に遠く離れた郎女が寓喩されている。

高円歌群 A に立ち戻ってみると、四二九五番歌は、「紐解く」というように、まさに身分差を越えて同心の仲間たちと楽しむという挨拶歌から始まっている。続く二首で萩の花が詠まれているのは、高円の野辺が萩の名所であるからだと思われるが、清麿が雁の鳴き声を詠むのは、雁が音と萩との取り合わせが秋の季節歌を形成しているのみならず、雁が音が恋情や望郷、悲しみなど、「別離」の思いを導く景物だからである。そこにはおそらくこの宴に集う三名の思いがかつての高円への回想としてあり、ひいては聖武天皇を偲ぶという共通の思いがあったからだと思われる。

る。家持がその思いを「所心」と記したのは、宴に同席することがかなわない聖武天皇への思いを込めたからであるに違いない。

〔高円歌群 B〕

宮人の袖付衣秋萩にはほひよろしき高円の宮

高円の宮の裾廻の野づかさに今咲けるらむ女郎花はも  
(卷二十・四三二五)

秋野には今こそ行かめもののふの男女の花にはひ見に  
(同・四三二六)

秋の野に露負へる萩を手折らずてあたら盛りを過してむと  
(同・四三二七)

か  
高円の秋野のうへの朝霧に妻呼ぶ雄鹿出で立つらむか  
(同・四三二八)

大夫の呼び立てしかばさを鹿の胸分け行かむ秋野萩原  
(同・四三二九)

右の歌六首は、兵部少輔大伴宿禰家持の、独り秋の野を憶ひて、聊かに拙き懐を述べて作れり。  
(同・四三三〇)

この歌群の左注には「独り秋の野を憶」うと記されている。「独り」の語は、一義的に恋歌において伴侶の不在を

意味するが、家持の「独り」については、吉村誠氏が「独詠」の自覚化を指摘するように、「独り」で省察する文学の成立を見ることができ<sup>16)</sup>る。

また「拙懐」は、家持独自の語句である。

キ 十一日に、大雪の降り積ること尺に二寸あり。因りて拙き懐を述べたる歌三首

大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し (巻十九・四二八五)

御苑生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ (同・四二八六)

鶯の鳴きし垣内にはへりし梅この雪に移るふらむか

(同・四二八七)

ク 私に拙き懐を陳べたる一首并せて短歌

天皇の 遠き御代にも 押し照る 難波の国に 天の下 知らしめしきと 今の緒に 絶えず言ひつつ 懸けまくも あやに畏し 神ながら わご大王の うちなびく 春の初は 八千種に 花咲きにほひ 山見れば 見のともしく 川見れば 見の清けく 物ごとに 栄ゆる時と 見し給ひ 明らめ給ひ 敷きませる 難波の宮は 聞し食す 四方の国より 奉る 貢の船は 堀江より 水脈引きしつつ 朝風に 楫引き浜り 夕潮に 棹さし下り あち群の 騒き競ひて 浜に出で

て 海原見れば 白波の 八重折るが上に 海人小舟はららに浮きて 大御食に 仕へ奉ると 遠近に 漁り釣りけり そきたくも おぎろなきかも こきばくも ゆたけきかも ここ見れば うべし神代ゆ 始め けらしも (巻二十・四三六〇)

桜花今盛りなり難波の海押し照る宮に聞こしめすなへ (同・四三六一)

海原のゆたけき見つつ蘆が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ (同・四三六二)

右は、二月十三日、兵部少輔大伴宿禰家持

「拙懐」の語句は、松田聡氏がキについて「君臣和樂の宴を志向していた家持が独りの世界に沈潜し、私的な追懐に浸った時に、初めて自己の内なる『拙懐』を対象として捉えることができた」と指摘している。確かにこの歌には、元正天皇の肆宴において家持自身が詠んだ、「大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも」(巻十七・三九二六)の歌が想定される上、クは難波行幸を想定した応詔の場という、幻想ともいふべき天皇の御前での晴の場への思いを詠出している。また一方で、家持の「懐」と記される作品には「述懐」があり、辰巳正明氏は、「懐中の悲哀や孤独を歎く内容を基本」としながら、家持において六朝詩学の理解によって季節の景によって興る「懐」

を述べる歌の方法へ展開したことを指摘している<sup>16</sup>。高円歌群Bは、基本的に「秋」の季節歌で構成されている。もちろんここには佐藤隆氏や山崎健司氏が家持初期の秋の歌との関係について詳細に論じられているように、これらの歌に導かれながら、聖武天皇在位中の華やかな思い出の追憶が詠出されていると思われる。しかし、この歌群において家持が季節の景物に重きを置いたのは、そこに「拙懐」という詩学の問題が存在したからだと思われる。なぜなら「拙い」という価値観は主観的なものであり、何をもって「拙い」と述べたかが問題となるからである。家持歌において「拙」の表記は、「抑鄙里の少児に聞くに、古人は言に酬へぬこと無しといへり。聊かに拙詠を裁り、敬みて解咲に擬ふ」（巻十七・三九七六―三九七七）とあり、ここでは家持と池主との贈答書簡において、池主の歌と比較して自分の歌が「拙詠」だという。またこの他、防人歌において、防人部領使らが進上した歌の中で、「拙劣歌」は載せなかったとあり、家持は『万葉集』に採録した防人歌と比較して未掲載の歌を「拙劣歌」としたのである。つまり、あるべき姿の比較対象があつた上で「拙い」という価値基準があるということであろう。先述した「拙懐」歌は、キが天皇肆宴の場、クが行幸の場で歌を披露することがあるべき状態だといえるだろう。高円歌群Bで家持が「拙懐」

と記したのは、本来聖武天皇と共に高円での季節の公宴に参加して、季節の歌を披露することが理想的な状態でありながら、時間的、空間的に叶わないことに対して「拙懐」と記したのだと思われる。つまり、この歌群においても家持のまなざしは聖武天皇へ向けられ、在りし日の聖武朝への回顧、愛惜の念が独詠によつて詠出されていると考えられる。

### 三 高円歌群の依興歌

#### 〈高円歌群C〉

興に依りて各々高円の離宮処を思ひて作れる歌五首

高円の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠退けば

（巻二十・四五〇六）

右の一首は、右中弁大伴宿禰家持

高円の峰の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや

（同・四五〇七）

右の一首は、治部少輔大原今城真人

高円の野辺はふ葛の末つひに千代に忘れむわが大君かも

（同・四五〇八）

右の一首は、主人中臣清麿朝臣

はふ葛の絶えず思はむ大君の見しし野辺には標結ふべしも

（同・四五〇九）

右の一首は、右中弁大伴宿禰家持

大君の継ぎて見すらし高円の野辺見ること（注20）に哭のみし泣かゆ

右の一首は、大藏大輔甘南備伊香真人

（同・四五一〇）

高円歌群Cの題詞には、「依興」とある。「依興」は、家持の独自の表記方法であり、周知の通り小野寛氏と橋本達雄氏の論争から始まり、（注19）漢籍や六朝詩学からの言及や歌日記の注記としての位置づけなど多方面から議論されてきた。ただ辰巳正明氏が指摘するように、家持の「興」と記す作品が単なる感興によるものではなく、これが「二上山賦」から始まっていることは、家持の越中における中国文学を意識した作歌方法の転換期として重要であり（注20書、以下に触れるように家持の高円歌群自体も詩学的な意識が通底しているように思われる。この「興」については、辰巳氏が「六義」としての「興」という点から平安朝の『古今和歌集』へと繋がる文学理論の原理の問題を指摘している（注20書）。『文心雕龍』（「比興」第三六）によると、

豈不以風通而賦同、比顯而興隱哉。故比者附也、興者起也。附理者切類以指事、起情者依微以擬議。起情、

故興體以立、附理、故比例以生。比則畜憤以斥言、興則環譬以託諷。蓋隨時之義不一、故詩人之志有二也。

觀夫興之託諷、婉而成章。稱名也小、取類也大。（注21）

とあり、「比は顯にして興は隱」であるという。また「興」が「起」であるというのは、感情を中心とする作品において、感情と微妙な関係にある事物に託して主題を述べることにあるというのであり、ゆえに「託諭」を見ると、その表現は婉曲でありがなら意味は明かであると述べている。また『毛詩正義』（毛詩注疏卷第一）には、鄭司農いわくとして、「興者、託事於物則興者起也。取譬引類、起發已心、詩文詩舉草木鳥獸以見意者、皆興辭也。」を引く。ここでは事物を述べることによつて詩人の心を表すことが「興」であるという。一方『詩品』では、「故詩有三義焉、一曰興、二曰比、三曰賦、文已盡而意有餘、興也、因物喻志、比也、直書其事、寓言寫物、賦也。」とあり、「興」については、「文已に尽きて而して意余り有るは、興なり」と規定する。言葉が尽きても余情が残るというのであり、換言すれば言外に真意があることが「興」であるというのである。中国詩学において六義の「興」の定義については、解釈の幅はあるものの、基本的には「物」に託した隱喻を指し、「文」に現れないところに「情（志）」を述べることだと説明できよう。

このような「興」の表現方法（詩学）を踏まえて高円歌群Cの成立について検討してゆきたい。高円歌群Cは家持



の歌から始まる。家持が歌う高円の景とは、荒れた離宮の様のみであるが、荒れた地は『万葉集』において次のように見える。

ケ 高光るわが日の皇子のいましせば島の御門は荒れずあらましを  
(巻二・一七三)

コ 三笠山野辺行く道はこきだくも繁り荒れたるか久にあらなくに  
(巻二・二三三)

サ 愛しきかも皇子の命のあり通ひ見しし活道の路は荒れにけり  
(巻三・四七九)

ケは日並皇子の死に対して舍人らが「慟傷」した歌群の一首であり、コは志貴皇子、サは安積皇子に対する挽歌である。これらの表現は、皇子たちの死によって通わなくなったことにより、御門や道が荒れてしまったという挽歌の発想による表現方法であり、死者への追憶と愛惜の念の表出が重視されている。家持の若かりし時の記憶は、内舍人として聖武天皇といつも共にあり、それゆえにその御代が遠のいてしまったことを嘆くのである。この家持の視線は、挽歌の発想により、聖武朝という、現在とは断絶してしまつた過去の追慕へと向けられているのである。つまり「興」という点から見るとこの歌の言外にある心は、現在の否定つまり今の時代に迎合できない思いだと思われる。

二首目の大原今城の歌は、前歌の「荒れにけり」を承け

たもので、高円の峰の上の宮は荒れたとしても聖武天皇の名は、我々の記憶として何時までも忘れないでいようという内容であり、ここには聖武天皇への強い思いが読み取れる。「何時までも名を忘れない」という歌は、明日香皇女の挽歌に、「明日香川明日だに」「二は云はく、さへ」見むと思へやも（二は云はく、思へかも）わご大君の御名忘れせぬ（二は云はく、御名忘れえぬ）（巻二・一九八）とあり、明日香川を皇女のおよびとして、その名前に懸けて明日だけとは言わずにずっとその名を忘れないのだと歌われるように、死という永遠の別れへ深い嘆きが詠まれている。今城が「君の御名忘れめや」と言つたのも家持と同様に、過去となつてしまった聖武朝への深い愛惜と同時に、今の時代に迎合出来ない思いが言外に託されていると見るべきであろう。

三首目の清麿の歌は今城の「御名忘れめや」を承けたもので、高円の野辺を這い延びる葛のように千年の後に忘れてしまうような大君でありましょうかという内容である。千代や万代という表現は、

：寒き夜を いこふことなく 通ひつつ 作れる家に  
千代にまで 来ませ大君よ われも通はむ

：音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く  
(巻一・七九)

思ひ行かむ　み名に懸かせる　明日香河　万代までに  
愛しきやし　わご大君の　形見かこを

(巻二・一九六)

み吉野の　芳野の宮は　山柄し　貴くあらし　川柄し  
清けくあらし　天地と　長く久しく　万代に　変らず  
あらむ　行幸の宮

(巻三・三二五)

古昔に君し三代経て仕へけりわが大王は七世申さね

(巻十九・四二五六)

のように、基本的に対象への讚美表現である。千年の後までも聖武天皇の素晴らしい事績は決して忘れないのだという、天皇への讚美と共に強い意志の表明と誓いとを読み取ることができる。今の世よりも聖武朝への讚美が優先しているのである。清麿は宴の主人として、ここに集う仲間たちの結束を促したのだと思われ、やはりこの歌も今の時代に抗う思いが言外にあると思われる。

四首目家持の歌は、清麿の「野辺はふ葛」を承けたもので、這い延びる葛のように絶えず思ふために、人が立ち入らないように標を結うべきだと提案する内容である。「標」は万葉歌の中においては、恋歌の中で親の監視や約束、また「標野」という御料地などの多義性を持つ。

祝部らが齋ふ社の黄葉も標繩越えて散るといふものを

(巻十・二二〇九)

大伴の遠つ神祖の奥津城はしるく標立て人の知るべく

(巻十八・四〇九六)

二二〇九番歌は譬喩歌であり、一義的には祝部らが守る聖域を表す縄である。四〇九六番歌は大伴氏の功績を忘れないため、大伴の遠つ神祖の墓に標をたてようという内容である。家持が高円の野に標を結うべきことを提案したのは、ここに集った仲間たちは聖武天皇こそが心の支えであり、この野辺を彼らの聖地として守ろうとしたからであると思われる。やはりここも聖武天皇との紐帯を守ろうという今の時代に迎合できない思いが現れている。

五首目の甘南備伊香は、大君は今も続いて見ているであろうこの高円の野辺を見る度に、声を上げて泣けてしまふことだという内容である。伊香の心の中で聖武天皇は生き続けているのであるが、しかし、もちろんそれは幻想に過ぎず、現実の野辺を見る度に声を上げて泣いてしまふというのである。「哭のみし泣かゆ」という歌語は、

：遠つ国　黄泉の界に　はふ葛の　各が向き向き　天  
雲の　別れし行けば　闇夜なす　思ひ迷はひ　射ゆ猪  
鹿の　心を痛み　葦垣の　思ひ乱れて　春鳥の　音の  
み泣きつつ　味さはふ　夜昼知らず　かざろひの　心  
燃えつつ　悲しび別る

(巻九・一八〇四)

葦屋のうなひ処女の奥津城を往き来と見れば哭のみし

泣かゆ

(巻九・一八一〇)

遠音にも君が嘆くと聞きつれば哭のみし泣かゆあひ思ふわれは

(巻十九・四二二五)

畏きや天の御門をかけつれば哭のみし泣かゆ朝夕にし

て (巻二十一・四四八〇)

とあるように、死者を悼む挽歌的表現である。伊香の心の中で天皇が生き続けているにも関わらず、野辺を見ると聖武天皇の死という現実を突きつけられることによる大きな嘆きとすることができるであろう。ここには過去に生きる伊香の心裡が表出されているのであり、やはり今の時代に迎合できない思いが現れている。

このように高円歌群Cは、それぞれが歌語を引き受けながら高円離宮をテーマに歌うことよって、聖武天皇の追慕、愛惜という表の思いと同時に、言外に今の時代に迎合できない裏の思いが込められていることが知られる。家持が集団詠である高円歌群Cに「依興」と記したのは、この宴に集った人々が、高円離宮を偲ぶことでしか今の思いを公言できない状況にあったことを示唆するためであると思われる。高円歌群Cが作歌された時は、すでに仲麻呂が朝廷の実権を掌握していた時代であった。家持ら聖武天皇を慕う人々にとっては、反体制的な発言をすることは、己の身を滅ぼすことにも繋がる危機的な状況だったと考えられ

る。このような状況下において、今の閉塞した思いを述べる方法、これが「興」という方法による歌であったのである。この時代に橘奈良麿の事件がすでに進行しつつあった。

#### 四 『万葉集』最終歌の成立

このような未来への光が見えない状況の中で、家持は因幡国への下向が決まり、またそれは『万葉集』の終焉へと向かつてゆく。

三年の春正月一日に、因幡国の序にして、饗を国郡の司等に賜へる宴の歌一首

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

(巻二十一・四五一六)

右の一首は、守大伴宿禰家持作れり。

この正月の歌をもって『万葉集』は閉じられる。この歌は〈歳旦立春<sup>24)</sup>〉に〈雪の瑞祥<sup>25)</sup>〉があつたことを寿ぐ内容を歌っていることが指摘されている。さらに塩沢一平氏は「新しき年の始め」の詞章が「聖武朝・久迩京・橘諸兄政権」の始まりを象徴する類型の中にあり、家持歌に至り、瑞兆と暦節日との邂逅による予祝歌へと変容を遂げたと指摘している<sup>26)</sup>。〈歳旦立春〉という「今日」なる日の「暦日

意識」については田中新一氏や大濱眞幸氏が、「曆日的季節観」と「節月的季節観」との「二元的季節観」を指摘しており示唆に富む見解である（注24書）。確かに大濱氏が指摘するように、家持は『万葉集』最終歌の前々年の十二月に、年内立春を明日に控えた大監物三形王の宅の宴で次のような歌を詠む。

あらたまの年行きがへり春立たばまづわが屋戸にうぐ  
ひすは鳴け  
（巻二十・四四九〇）

また、この宴の五日後の、立春を迎えた後の治部少輔大原今城真人の宅の宴では、

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬ  
とか  
（巻二十・四四九二）

と、年内立春という冬と春のあわいの中に、十二月中に迎える春（立春）への期待（四四九〇）と、曆的には冬であるが立春を迎えたことによるかすかな春の発見（四四九二）を歌っている。また、暦日と節日との重なりが寿歌としてふさわしいことは、

二年の正月三日に、侍従・豎子・王臣等を召して、内裏の東の屋の垣下に侍はしめ、即ち玉箒を賜ひて肆宴しき。時に内相藤原朝臣勅を奉りて、宣はく「諸王卿等、堪ふるまにま、意に任せて、歌を作り并せて詩を賦め」とのりたまへり。仍りて詔

旨に応へ、各々心緒を陳べて歌を作り詩を賦めり。  
〔いまだ諸人の賦める詩と作れる歌とを得ず〕

初春の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらく玉の緒  
（巻二十・四四九三）

右の一首は、右中弁大伴宿禰家持の作。ただ大藏の政に依りて奏し堪へざりき。

の歌からも見て取れる。正月三日に肆宴が催され、玉箒が下賜された。家持は歌の奏上を期待して、玉箒の玉が揺れる―臣下の奉仕―のみでなく、それが「初春の初子の今日の」であることを歌うことによつて最大限の寿歌を予め作歌したのである。

このような巻二十後半の経緯の中で、家持が「新しき年の始めの初春の今日」と歌つたのはまさに、新しき年（新年）、年の始め（元旦）、初春（立春）の三つが重なるという、慶祝の言葉を連続することで最大限にこの正月を寿いだからだと思われる。家持がこのような三つの暦の重なりを詞章を紡ぎ出したのは、おそらく『懷風藻』にあるような知識を理解していたからだと考えられる。

五言。元日宴。応詔。長屋王（詩番六七）

年光泛仙薊。月色照上春。玄圃梅已故。紫庭桃欲新。  
柳糸入歌曲。蘭芳染舞巾。於焉三元節。共悦望雲仁。

〔年光仙薊に及び、月色上春に照る。玄圃の梅已に故り、紫庭

の桃新たならんと欲す。柳糸歌曲に入り、蘭芳舞巾を染む。焉に三元の節、共に悦ぶ望雲の仁。」

ここにみえる「三元節」とは、『荆楚歳時記』に、「正月一日は三元之日也」<sup>(29)</sup>とあり、『陳書』光大元年春正月癸酉の記事に「今三元改曆、萬國充庭」(本紀第四)、『初学記』巻第四に「正月一日是謂正月…(中略)…亦云三元(歳之元。時之元。月之元。)(歳時部下、元日第一)」とある。天平宝字三年の年初は、このような三元の節日である上に更に瑞雪が降るといように、もつとも心を高揚させる正月を迎えたのである。その喜びを因幡の国の官人らに示したのである。

その家持の心の高揚は、あの越中国守の時の喜びに等しい中であろう。しかし、越中の正月と因幡の正月における家持の心裡の異なりは大きいように思われる。越中では池主などの友を得て新たな希望の中に家持歌が出発したのに対して、因幡への下向は京に思いを残して過去に身を置き、希望のないままに因幡での正月を迎えたのである。三元の節を喜びながらも、それは因幡の郡司らに向けた正月の寿詞であり、それが済めば家持に残されるのは未来ではなく、今の政事に迎合できない思いである。つまり、家持に残されたのは国守として肅々と公務を遂行することのみであり、それが家持の生きる道であったということであろう。家持

の歌の力は、このような状況の中で失われていったものと思われる。

## 五 おわりに

『万葉集』巻二十を貫く高円歌群は、家持の精神史を描き出している。「所心」と記載される歌は、基本的に不在の相手への思いが歌われる。高円歌群Aで集った者たちが「所心」を述べたと記したのは、かつての聖武朝を回顧し、宴の中心となるべき聖武天皇が現在という時において不在である悲しみが参加者に共通した心情だったことが考えられる。続く高円歌群Bの独詠の「拙懐」歌は、自分自身の不遇感とともに、対象へ空間的、時間的に距離を感じることによって自己の思いが届かないことを指す。家持が独りかつて栄えていた高円の野を回想し、その秋の美しい風景を詠むのは、高円への空間的距離感以上に、聖武天皇の御代が遠い昔となってしまったことへの内省であり、愛惜の情が主眼となっている。

高円歌群Cの「依興」歌は、中国詩学の「興」に依った記載であると考えられ、歌の表に述べたことのみならず、歌自体には表れない心情が隠されている。家持がこの歌群を「興」であると規定したのは、すでに過去のものとなつてしまった聖武天皇の高円離宮への追慕や哀惜の情を詠む

ことで、聖武朝への回顧のみではなく、仲麻呂が力を振るう今の時代に迎合できないという反体制的な表に出すことができない裏の心情があることを示唆しているのである。

『万葉集』の最終歌が詠まれたのは、まさにこうした今という時代への絶望を抱いている時期であった。家持は高円歌群Cの五ヶ月後に因幡国に赴任することになるのである。因幡国はかつて若かりし頃に赴任した越中国と同じような雪深い場所であったに違いない。家持は因幡国で赴任して初めての正月を迎えた。その年はまさしく、立春が正月一日にあたる年であった。そのことによって、新年・元旦・立春の重なりである三元節を寿ぐ気持ちが生じたのであろう。しかも、祥瑞の雪が降るといふこの上ない正月の寿歌をもって歌への想いを燃焼し尽くしたものと思われる。そこには、家持の一縷の望みが託されていたに違いないが、しかし『万葉集』はこの歌をもって閉じたのである。このようにして、『万葉集』は歌によって心を開いていた家持が、さらに深い悲しみへと向かう予感の中で心を閉ざしたことにより終焉を迎えたのである。

## 注

(1) 本文中A、B、Cはそれぞれ高円歌群A（巻二十・四二九五〜四二九七）、高円歌群B（巻二十・四三二五〜

四三二〇）、高円歌群C（巻二十・四五〇六〜四五二〇）を指す。以下同じ。

(2) 伊藤博『萬葉集釋注』は、高円歌群Aについて、「この高円歌群が山の山頂にあった聖武天皇離宮、つまりは聖武天皇その人への憧憬・敬仰に連なっている」という川口常孝「橘奈良麿の変」（『大伴家持』桜楓社、一九七六年）。

(4) 中臣清麻呂の薨伝は、『続日本紀』延暦七年七月二十八日に載る。訓読文は新日本古典文学大系『続日本紀』（岩波書店）による。

(5) 『万葉集』の引用は、中西進『万葉集全訳注原文付』（講談社）による。以下同じ。

(6) 「所思」の語は、『樂府詩集』第十六卷、鼓吹曲辞一、漢鏡歌十八首の古辞に「有所思」、卷十七卷、鼓吹曲辞二、漢鏡歌中「有所思二十六首」、第十九卷、鼓吹曲辞四、宋鼓吹鏡十五首に何承天「有所思篇」があるほか、『文選』卷二八、陸士衡「君子有所思行」、卷三一、鮑明遠「代君子有所思」、『玉台新詠』卷八、庾肩吾「詠得有所思」、卷十、謝朓「同王主簿有所思」などがある。また、吳兢『樂府古題要解』には、「有所思」について「但言離思而已」と説明する。

(7) 瀬間正之「万葉集卷十六題詞・左注の文字表現」（『万葉集研究』第二十六集、塙書房、二〇〇四年）。

(8) 白居易の「對火玩雪」に、「平生所心愛 愛火兼憐雪 火是臘天春 雪為陰夜月」とある。

- (9) 朱慶餘の「送滕庶子致仕歸江南」に、「在處饒山水  
 堪行慰所心」とある。『漢語大詞典』には、「謂心中所想  
 往的」と説明されている。
- (10) 渡瀬昌忠『萬葉集全注』巻第七。
- (11) 澤瀉久孝『萬葉集注釈』や伊藤博『萬葉集釋注』など  
 に指摘されている。
- (12) 高円の野辺に咲く萩については、「高円の野辺の秋萩  
 いたづらに咲きか散るらむ見る人無しに」(巻二・二三  
 一)、「高円の野辺の秋萩な散りそね君が形見に見つつ思  
 はむ」(同・二三三三)、「高円の野辺の秋萩この頃の曉露  
 に咲きにけむかも」(巻八・一六〇五)、「秋風は日にけ  
 に咲きぬ高円の野辺の秋萩散らまく惜しも」(巻十・二  
 一一一)などがある。
- (13) 佐野あつ子氏『雁の使』と恋歌の形成(『女歌の研  
 究』おうふう、二〇〇九年)は、雁のテーマ化は儒教的  
 解釈において位置づけられると共に、恋の悲しみや苦し  
 みを相手に伝える鳥として玉台世界と共有していること  
 を論じている。
- (14) 吉村誠「大伴家持の題詞・左注表記『独』の特徴」  
 『大伴家持と奈良朝和歌』おうふう、二〇〇一年)。
- (15) 松田聡「拙懐―帰京後の家持―」(『家持歌日記の研  
 究』塙書房、二〇一七年)。
- (16) 辰巳正明「述懐―家持の自然」(『万葉集と中国文学』  
 笠間書院、一九八七年)。
- (17) 佐藤隆「秋歌―天平勝宝六年の秋野歌を中心に―」  
 (『大伴家持作品論説』おうふう、一九九三年)。
- (18) 山崎健司「高円独詠歌群―大伴家持試論」(『万葉集研  
 究』第十五集、塙書房、一九八七年)。
- (19) 小野寛「家持の依興歌」(『大伴家持研究』笠間書院、  
 一九八〇年)。橋本達雄「二上山の賦をめぐって」(『大  
 伴家持作品論攷』塙書房、一九八五年)。
- (20) 六朝詩学の立場からは、辰巳正明「依興歌の論」(『万  
 葉集と中国文学』笠間書院、一九八七年)、胡志昂「家  
 持における「興」の意味―その文学観念との関連におい  
 て―」(『奈良万葉と中国文学』笠間書院、一九九八年)、  
 鉄野昌弘「興」と「無常」―「歌日誌」への試論」  
 (『大伴家持』歌日誌論考』塙書房、二〇〇七年)など  
 がある。また歌日記としての注記の立場からは、松田聡  
 「依興―家持歌日記の問題として―」(『家持歌日記の研  
 究』塙書房、二〇一七年)などがある。
- (21) 『文心雕龍』の引用は、戸田浩暁、新釈漢文大系『文  
 心雕龍』(明治書院)による。
- (22) 『毛詩正義』の引用は、十三経注疏整理本『毛詩正義』  
 (北京大学出版社)による。
- (23) 『詩品』の引用は、高木正一『鐘磔詩品』(東海大学出  
 版社)による。
- (24) 『歳旦立春』については、田中新一「二元的四季観の  
 発生と展開(古今集まで)」(『平安朝文学に見る二元的  
 四季観』風間書房、一九九〇年)、大濱眞幸「大伴家持  
 作『三年春正月一日』の歌―「新しき年の初めの初春の

今日」をめぐって―」（『日本古典の眺望』桜楓社、一九九一年）の指摘がある。

(25) 「雪の瑞祥」については、王権との関わりから辰巳正明「雪の驟」（『万葉集と中国文学 第二』笠間書院、一九九三年）、また井上さやか「雪とよごと―大伴家持の巻二〇・四五―六番歌―」（『叙説』三七号、二〇一〇年三月）などがある。

(26) 塩沢一平「新しき年のはじめ―続日本紀歌謡と万葉歌―」（『万葉歌人 田辺福麻呂論』笠間書院、二〇一〇年）。

(27) 拙稿「応詔儲作歌における君臣像の特色とその意義」

（『大伴家持と中国文学』笠間書院、二〇一四年）。

(28) 『懷風藻』の引用は、辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院、二〇一二年）による。

(29) 注28の【注釈】には『荆楚歲時記』の他に、「歳改三元」（南齊書何昌列伝）、「万寿三元始」（樂府燕射歌辭「梁三朝雅樂歌介雅」）、「三元宝曆新」（唐顔師古「奉和正日臨朝」）などの指摘がある。

(30) 『陳書』の引用は、『陳書』（中華書局）による。

(31) 『初学記』の引用は、『初学記』（中華書局）による。